

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：87111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03180

研究課題名(和文) 山岳霊場・信仰遺跡における空間構造の復元的研究-豊前等覚寺を事例に-

研究課題名(英文) Restorative study on the spatial structure of mountain sacred sites and religious sites-a case study of Buzen-Tokakuji

研究代表者

岡寺 良 (OKADERA, RYO)

九州歴史資料館・文化財調査室・研究員(移行)

研究者番号：70543693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：山岳信仰の霊地として知られる英彦山には、「彦山六峰」といって、旧豊前国内に英彦山の祭式を共有する6つの修験集団があり、英彦山と共に豊前の修験文化を特色づける存在となっている。本研究では、松会と呼ばれる修験行事が未だに残る普智山等覚寺(福岡県京都郡苅田町)をフィールドとし、その山岳信仰の実態を解明するため、考古学的な現地踏査を実施した。具体的には、等覚寺の古文書に記される「宿」の一つ一つを、山岳信仰の観点から現地を踏査・測量・ドローン撮影、さらには三次元モデル作成を通じて明らかにした。それらの成果を総合することで、等覚寺の山岳信仰の実態、ひいては彦山信仰の実態の一端を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英彦山の山岳信仰に関する研究は、英彦山そのものを研究素材として多くの研究がなされてきた。しかし英彦山は非常に広大な山岳霊場・信仰遺跡でその全容を解明することは難しい。また英彦山そのものの研究だけでは英彦山の山岳信仰を解明することは困難であり、本研究では英彦山の修験の峰入りにも深くかかわる彦山六峰のうち、等覚寺をフィールドとして現地遺跡の調査研究を実施し広大に広がる霊域の存在を明らかにした。高度に科学が発達した現代でも山の災害が多い日本では、人々の暮らしは山とのつながり抜きで考えることは難しい。山岳信仰の歴史の解明は現代社会を生きる我々にその歩むべき道筋を与える一助となるものであるといえよう。

研究成果の概要(英文)：Hikosan, known as a spiritual place for mountain worship, has six religious groups called "Hikosan-Roppou", which share the festival ceremony of Hikosan in the former Buzen country. In this study, the field of Fuchisan Tokakuji (Kanda-town, Miyako-gun, Fukuoka Prefecture), where a religious event called Matsue still remains, was taken as a field, and an archaeological site survey was conducted to elucidate the actual state of mountain worship. Specifically, each of the inns described in the ancient documents of Tokakuji was clarified through reconnaissance, surveying, drone photography, and the creation of a three-dimensional model from the viewpoint of mountain worship. By synthesizing those results, we were able to clarify the actual situation of the mountain worship at Tokakuji, and a part of the reality of the Hikosan worship.

研究分野：考古学

キーワード：山岳霊場・信仰遺跡 普智山等覚寺 彦山信仰 山岳信仰 修験 三次元モデル作成 ドローン撮影

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

九州北部地方には、英彦山・求菩提山・宝満山をはじめとして数多くの山岳信仰に関連する山岳信仰・霊場遺跡が多く所在する。近年それらの重要性が学術的に認識され、求菩提山は国の史跡に指定され、首羅山・英彦山・宝満山は国史跡の指定に向けての行政的な学術調査が進められ、2017年までに全てが国の史跡に指定された。

特に英彦山は、大峯山、羽黒山と並ぶ日本を代表する修験の霊山であり、その重要性は認識されてはいるものの、山は非常に広大であり、全容解明にはほど遠い状況であるが、日本の山岳信仰、山岳修験を解明するためには、この英彦山の山岳信仰を理解することが非常に重要であることは言うまでもない。

また、英彦山には、「彦山六峰」といって、旧豊前国内に英彦山の祭式を共有する6つの修験集団があり、英彦山と共に豊前の修験文化を特色づける存在となっている。中でも、普智山等覚寺(福岡県京都郡苅田町)には、既に英彦山でも途絶してしまっている「松会」という修験道最大にして最重要な行事が現在でも伝えられており、国の重要無形民俗文化財に指定されており、その重要性が窺われるが、次章の研究史に見るように、80~90年代に若干の調査がなされて以来、本格的な調査がなされていない状況であった。

### 2. 研究の目的

英彦山と共に豊前の修験文化の根幹となっている「彦山六峰」の一つ一つを総合的に解明していくことこそが、巨大で全容解明が困難な英彦山の山岳信仰の新たな側面を示すことができるのではないかと考え、豊前等覚寺の山岳信仰の調査・解明をする必要性を痛感した。

また折しも、松会が実施される等覚寺集落(北谷・本谷)の構成員の過疎化・高齢化が進み、2019年現在、世帯数は13戸まで減少し、後継者問題など松会行事そのものの存続が一段と困難となってきている。本研究は、松会の歴史的背景を明らかにする意味合いも有しており、松会の行事継承の意味を考える機会ともなればという切なる願いもあった。

上記の経緯、背景による、いち早い調査の必要性から、岡寺が当研究を申請・取得することとなったのである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究体制

当研究の解明のためには、山岳信仰・霊場遺跡という非常に特殊な遺跡の認知とその解析という蓄積された経験と高度な技術が必要であるため、貫山・高城山系・平尾台の主要稜線上を踏査する現地調査については、研究代表者の岡寺が中心となりつつも、日本全国の山岳信仰・霊場遺跡を調査されてきた宗教史研究者の山本義孝氏(袋井市立図書館館長)に研究協力を仰ぐと共に、さらに苅田町内の現地調査については苅田町教育委員会の若松善満氏にも協力を仰ぎ、美術工芸資料に関しては國生知子氏(甘木歴史資料館副館長)に協力を仰ぐ形で行うこととなった。

#### (2) 研究方法

調査方法としては、現地踏査は単に現地を確認するのみではなく、以下の3つの調査方法を特色として取り入れた。

##### 簡易GPSによる領域内の調査

山中では、平地と異なり、現在地を地図に反映することは困難であるし、数多くチェックする場合、一つ一つ印刷した地図にポイントを落としてメモをとるなど、非常に手間がかかり、誤りを招きかねない。しかし、GPSを携帯することにより、押さえたい位置を正確に把握するばかりでなく、自らが歩行した軌跡をラインとして記録することができ、入峰道・廻峰ルートの復元にも有用であった。

##### 3次元計測による信仰空間の立体的な把握

山中に存在する信仰遺跡は磐座や行場(窟・滝)など、自然物に由来するものが多く、その立地環境などが非常に重要視されるが、それを現地ではなく紙面上において具体的に示すことは非常に難しい。昨今、考古学の研究においても3次元計測による立体物の表現を視覚的に行う手法が採られてきているが、本研究においても、この手法を用いることとした。具体的にはSfm(Structure from Motion)といい、複数点の連続する画像データから3次元データを生成する手法を採った。

##### 上空からの撮影による眺望の確認による調査

山中は、当時とは異なり現在は樹木に覆われている場合が多い。かつてはその場所から周囲の風景や眺望を望むことができたが、現在ではそれが非常に困難となっている場合が多い。また、巨岩などはある程度上空から俯瞰した状態で見ることにより、新たな発見がなされる場合が往々にして考えられる。そのため、本研究においては空中撮影を多用することで、



三次元化された画像データ  
(内尾薬師)



現地調査の様子(龍智窟)

これまでは困難であった視点からの画像撮影を行うこととした。そのため、ドローン（DJI Phantom4 Pro）を導入し、研究代表者自身が操作・撮影を実施した。撮影にあたっては、航空法や各自治体の規則等を遵守し、必要手続き等を行った上で実施している。

#### 4. 研究成果

##### (1) 本研究における学術的成果

###### 等覚寺境内の実態の解明

等覚寺は、彦山六峰の一つとして、彦山修験道最大の行事として知られる春の予祝行事「松会」が唯一残る地として、非常に重要視されていた。また、過去には苅田町教育委員会によって、白山多賀神社、鳥居口遺跡、青龍窟などの発掘調査が行われ、現在、等覚寺の中核である白山多賀神社や青龍窟が古代末～中世に遡ることが明らかとなっていた。しかしながら、それらの古代末～中世の遺跡と、江戸時代以来の現在の集落とのつながりなどの詳細は明らかではなかった。

本研究では、少なくとも江戸時代まで遡ることのできる等覚寺集落の坊家の配置や、墓地の墓碑銘などの調査を行い、近世期以来の等覚寺集落の実態のかなりの部分が明らかとなった。英彦山の修験集落とは異なり、等覚寺は「百姓山伏」としての性格が強く、その始まりは、墓碑銘から元禄年間の権大僧都法印の称号を持つ修験者から始まるが、それ以後は、基本的には本山に正式に認可された修験者ではなかった。逆に言えば、そのような立場だからこそ、明治維新の神仏分離以後も、集落を離れて下山することなく、存続することができたものと想定できよう。

###### 等覚寺を中心とした廻峰行の存在

等覚寺の縁起類には、峯中の宿所として、11の宿が記載されている。過去の調査では、それぞれの位置の把握や、青龍窟の調査などは行われていたが、本研究においては、既に判明している宿の現地踏査と、窟などについては詳細な測量調査を実施、採集遺物などからもその年代を明らかにすることができた。また、所在不明だった宿についても、等覚寺周辺に残る磐座や拝所、行場と目される場所を入念に、現地調査を行うとともに、縁起類との比較を行うことで、ほとんど全ての宿の場所を推定することが可能となった。また、当初、この縁起類に書かれていた宿などは後世の牽強付会の可能性も想定していたが、等覚寺を中心とした廻峰行が中世段階において既に成立しており、その範囲は中世期普智山の領域を反映し、青龍窟から始まる記載順は普智山の四隅に結界を張り最後に西端で彦山秋峰の礼拝窟竜鼻宿までを結び再び再び青龍窟へと戻るルートを反映している。この経路は普智山一山が彦山秋峰成立に大きく関与していたことを想定することができた。

###### 等覚寺関連資料の実態把握

本研究は、等覚寺の山岳信仰を考古学的な現地調査を中心とした面から解明するものであるが、それだけでは山岳信仰の実態を語ることは非常に難しい。よって、考古資料、民俗資料、美術資料などの調査も積極的に行うように努めた。過去には、苅田町教育委員会によってそれらの資料も調査がなされ、ある程度の把握がなされていたが、その時点からかなりの年月も経ち、資料の所在すらも不明確になりつつある現状の中、部分的にはあるが調査を行うことができた。その中で新たに白山多賀神社に祀られた十一面観音、男神像の発見と、その信仰形態が縁起にある神名等と一致することや、県指定となっている神社境内から出土したと伝えられる銅製経筒の来歴の再確認や、その考古学的な位置づけなども行うことができた。個人所蔵資料も多い中で、悉皆的な把握を行うことまでは不可能ではあったものの、新たな発見はあったし、また今後の調査の足掛かりにすることができたのではないかと考える。

###### 等覚寺山麓の古代～中世遺跡の再検討と山岳信仰との関わりの提起

等覚寺の山麓の谷・山口・稲光などの各地区には、古代～中世の遺跡が、圃場整備などの開発行為に伴って、過去に発掘調査が行われた際に発見されていた。ただ、その時点では、あまり等覚寺との関連で語られることはあまりなかった。しかしながら、本研究において改めて遺跡の内容等を把握すると、中世段階においてこの地が非常に重要な場所、すなわち等覚寺の宗教勢力なくしては考えられないと推測することができた。等覚寺の集落は、おそらく近世より古い時代には成立しておらず、中世段階においては山麓のこれらの遺跡が、等覚寺の宗教者の拠点であったと考えることができるようになった。また、考古資料の再確認という点では、白山多賀神社や鳥居口遺跡から、古代の製塩土器片の出土を確認した。大宰府の宝満山以外にはほぼ確認できていなかった山岳部における古代製塩土器の存在は、古代に塩を用いた神祇的な祭祀が行われていたことも判明している。

###### 彦山六峰の中の等覚寺の位置付けの解明に向けて

本研究は等覚寺を中心としたものであったが、その比較検討のため、他の彦山六峰の様相を探るような調査も併せて行った。特に中津市の檜原山については、本研究においても関連する護摩札の調査も行うことができたが、本研究協力者の山本義孝氏が、過去に行っていた現地調査の成果について本書で報告することができ、それにより彦山六峰の実態がより明らかとなった。また、彦山六峰個々の把握のみならず、彦山秋峰の成立に彦山六峰が深くかかわっていたという想定も本書ではなされている。今後、等覚寺のみならず彦山六峰それぞれのより深い理解によって、実態が明らかになるのではないかとと思われる。

###### 新たな調査手法の導入とその可能性

本研究では、山岳信仰・霊場遺跡という自然崇拜を元に成立した遺跡を扱うことから、その信仰空間を把握することは非常に困難であり、それを如何にしてわかりやすく提示するかという課題の克服も大きな目的であった。それを解決する糸口として、ドローン撮影による俯瞰遠景

の撮影、三次元モデルデータ作成による把握などを試みることができた。対象によっては非常にわかりやすく提示することができたのではないかと思う。今後も技術に溺れることなく、明確な目的を持ち、新たな方法を模索する必要があるだろう。

## (2) 総括

なお、本研究の詳細な調査成果については、調査報告書(岡寺編 2020『彦山六峰・等覚寺の山岳信仰の研究 豊前等覚寺の山岳霊場・信仰遺跡現地調査報告書』九州歴史資料館発行)にまとめられており、上記に述べたような等覚寺の山岳信仰、さらには彦山六峰にかかわる考古学を初めとする様々な側面からの調査成果を提示した。

ただ、本研究を遂行するにあたっては、等覚寺、さらには彦山六峰という広域でつかみどころのない山岳信仰・霊場遺跡について、これまでの研究状況を十分に熟知した上で、研究協力者と共に、いかなる調査方法を行うべきかを熟慮及び試行錯誤を重ねた上で遂行した。

その結果、間違いなく等覚寺を初めとする彦山関連の山岳信仰・霊場遺跡の詳細を把握・公表し、それにより彦山信仰の一端を明らかにすることができたのではないかと思う。本研究の実施において行った様々な特色ある調査方法や発想についても、他の山岳信仰・霊場遺跡でも有効な手法であり、本書が今後そのような遺跡の調査・報告、さらには理解するにあたっての先行事例となれば幸いである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡寺 良	4. 巻 8
2. 論文標題 筑後・豊後における阿蘇山秋峰・入峰道上の宿・行場	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 第8回九州山岳霊場遺跡研究会資料集「肥後の山岳霊場遺跡-池辺寺と阿蘇山を中心に-」	6. 最初と最後の頁 138-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡寺 良	4. 巻 1
2. 論文標題 英彦山の峰入り道と四十八宿	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 第七回九州山岳霊場遺跡研究会資料集「英彦山-信仰の展開と転換-」	6. 最初と最後の頁 119-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡寺 良	4. 巻 1
2. 論文標題 英彦山の考古遺物	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 霊峰英彦山-神仏と人と自然と-	6. 最初と最後の頁 140-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡寺 良	4. 巻 1
2. 論文標題 英彦山の入峰と峰入り道	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 霊峰英彦山-神仏と人と自然と-	6. 最初と最後の頁 142-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡寺 良	4. 巻 1
2. 論文標題 英彦山のトップ・座主がいた屋敷「座主院」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 霊峰英彦山-神仏と人と自然と-	6. 最初と最後の頁 144-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡寺 良
2. 発表標題 肥前国峰入峰における行所の様相-現地踏査の成果から-
3. 学会等名 第39回日本山岳修験学会大山学術大会研究発表
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡寺 良
2. 発表標題 豊前の戦国城郭と等覚寺城
3. 学会等名 苅田町第10回 まちの歴史講座（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岡寺 良
2. 発表標題 等覚寺の山岳霊場・信仰遺跡の調査について
3. 学会等名 科研費助成事業「山岳霊場・信仰遺跡における空間構造の復元的研究-豊前等覚寺を事例に-」成果報告会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡寺 良
2. 発表標題 等覚寺の山岳信仰と彦山六峰
3. 学会等名 令和元年度求菩提資料館歴史講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岡寺 良・若杵善満・山本義孝	4. 発行年 2018年
2. 出版社 苅田町教育委員会	5. 総ページ数 32
3. 書名 等覚寺の山岳信仰と松会	

1. 著者名 岡寺 良・若杵善満・山本義孝・國生知子・山口裕平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 九州歴史資料館	5. 総ページ数 159
3. 書名 彦山六峰・等覚寺の山岳信仰の研究-豊前等覚寺の山岳霊場・信仰遺跡現地調査報告書-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山本 義孝  (Yamamoto Yoshitaka)		

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	國生 知子  (Kokusho Tomoko)		
研究協力者	若杖 善満  (Wakasugi Yoshimitsu)		